

自己改革

J A紀南の挑戦

J A紀南は地域農業の多様な担い手育成のため、組合員や地域住民を対象にした「農業塾」を開いている。約8カ月で9〜10回の講座を開き、現場実習を中心に野菜栽培等の基礎を学ぶ。顔ぶれは女性や高齢者、定年帰農など多彩だ。J A

現場実習中心に農業を学ぶ

参加を契機に直売所出荷も

農業塾は平成24年から始まり今年で7期目を迎える。今期まで234人が受講し、内訳は



講義は現場中心に、J Aの営農指導員によるキュウリなど夏野菜の管理面のポイントの話に聞き入る農業塾生（今年6月、とんだのJ A実習圃場で）

男性が78人(33%)、女性が156人(67%)だ。参加者は田辺から串本まで管内全域に亘り、平均的な年齢は55〜60歳だが、20代や80代もいる。夫婦で参加する場合もある。塾のスタート時期は例年3月頃で、11月頃にかけて毎月1回の講座を開く。現場での農作業体験を重視し、9〜10回中の講座のうち6回はとんだ地区のJ A圃場での実習を取り入れる。

習得内容は「家庭菜園の拡大版」というイメージだ。ナス、トマト、エダマメ、カボチャなどの夏野菜類と、秋に収穫するサツマ

イモ、11月収穫のキャベツやブロッコリーも栽培する。修了式に品評会を開くため、各自が自宅でハクサイやカブの栽培にも挑戦する。カリキュラムでは、栽培面以外にも、肥料成分や土づくり、農薬や農機具の基礎知識などの講義も取り入れる。講師はJ Aの営農指導員が担当し、外部講師を招く場合もある。指導部は「参加者は極力農業を使いたくないという方が多い」と言う。一方、実習中の野菜が虫に食われたり、病気が発生した葉や果実を目にし「実習を通じて農業の必要性も理解されているようだ」と話す。今期のカリキュラムも7月で第5回を終え中盤に差し掛かった。指導部は「長い期間で



農業塾参加を契機に紀菜柑出荷に力が入る廣田健司・恭子さん夫妻（田辺市稲成町で）

あるが出席率も非常に良い。J Aとお付き合いのあった方はもちろん、農業塾のような活動をきっかけに、農や食に関心を持ち、J Aとのつながりが深まればと思う」と話している。

田辺市稲成町の廣田恭子さん(59)は平成28年の第5期農業塾の修了生。現在は夫・健司さん(59)との二人三脚でJ A直売所「紀菜柑」に年間通して野菜を出荷している。

恭子さんは定年退職後に家の裏の空き地で野菜作りを始めた。実家は農家だが、「農家が教えてくれる肥料をパラパラとふるといった加減が分からないので」と、農業塾入りを志望した。

J A紀南は自己改革の実践を通じ農業所得の増大や地域の活性化にチャレンジしています